Niigata University

12 当院における限局性前立腺癌に対する根治的治療として，前立腺全摘術と外照射療法の比較検討

金子 公亮・土田恵美子*・西山 勉
笹井 啓資*・高橋 公太
新潟大学大学院医歯学総合研究科機能再建医学講座腎泌尿器病態分野
同 分子細胞医学専攻遺伝子制御講座腫瘍放射線医学分野*

【対象と方法】1998年から2004年に当院とその関連病院において，限局性前立腺癌の診断の下に，根治的治療として前立腺全摘術が施行された76例と，三次元治療計画装置を用いた外照射療法が施行された85例を対象とした．全摘術症例では術前ホルモン療法を受けたものも含めた．外照射ではホルモン療法併用で64例，単独照射で10例，ホルモン抵抗性のため救済治療としての照射で11例に行われた．前立腺への総線量は60～71Gy（中央値70Gy）であった．PSA再発の定義は，3回連続するPSAの上昇で統一し，再発日はPSA nadirと3回連続上昇のうち最初のポイントとの中間点とした．

【結果】最終追跡時までPSA再発を生じた症例は，全摘術後で19例（25％）あり2年PSA非再発率は81.6％であった．外照射療法後では19例（22.4％）あり，2年PSA非再発率は全体で71％，初回治療群：75％，ホルモン抵抗性群：58％であった．原病死は，全摘術後では認めず，外照射治療後では3例（いずれも照射野外再発，うち2例はホルモン抵抗性）であった．

【結語】当院における限局性前立腺癌に対する根治的治療として，前立腺全摘術後と外照射療法後のPSA再発期間を比較検討した結果，全摘術のほうが2年PSA非再発率の点でやや良好な成績であった．

13 食道癌化学放射線療法の前に化学療法を施行された症例の検討

笹本 龍太・土田恵美子・阿部 英輔
福田 貴徳・笹井 啓資
新潟大学医歯学総合病院放射線科

【目的】当院における進行食道癌に対する導入化学療法後の化学放射線療法の治療成績が不良であるという印象を検証することを目的とした．

【対象】手術予定だったが化学療法後に手術不能となった症例が8例，手術予定なしが6例．導入化学療法の効果はCR：PR：NC：PD：不明＝0：1：8：3：2．導入化学療法後の化学放射線療法は低用量5FU±CDDP併用12例，Weekly TXT併用2例で，総線量の中央値は68Gyであった．

【結果】治療効果はCR：PR：NC：PD＝2：6：3：3で，中央生存期間は11か月．手術目的化学療法施行例に2年生存はいなかった．

【結論】当院における進行食道癌に対する導入化学療法後の化学放射線療法の治療成績は不良であった．その主な原因は手術目的の導入化学療法無効例が多かったためと思われる．手術前化学療法無効例においては，標準的化学放射線療法以外のアプローチが必要であると考えられた．

14 ノバリスによる体幹部定位放射線治療

松本 康男・杉田 公
県立がんセンター新潟病院放射線科

Novalisは体幹部病変に対しても適応可能な定位放射線治療線専用のリニアックで，大きく4つの特徴がある．

1）Exac Trac：赤外線マーカーによる自動の位置合わせとX線による高精度な位置合わせの機構．

2）マイクロマルチリーフ・コリメーター：アイソセンターで3mmのリーフで腫瘍の複雑な形状に無駄なく照射．

3）全自動のイメージ・フュージョン：CTとMRI，CTとCT，CTとPETなどDICOM規格の画像を癒合し，位置情報の基本になるCTデータ

NII-Electronic Library Service

Niigata University

にそれらの情報を付加可能.

4）治療計画装置（BrainSCAN）：IMRTをはじめ色々な治療計画が可能となっている.

当科では昨年7月より稼働を開始し本年4月末までに体幹部治療を97例に行った．肺腫瘍の治療は74例，肝腫瘍は23例であった．再照射例を除き，また2ヶ月以上の経過観察が可能であった症例を対象に解析を行い，肺/肝それぞれ70/20例であり，奏効率は86/85％であった．1アークでの治療を基本としているがgrade 2の放射線性皮膚炎の1症例を除き，grade 2以上の有害事象は認めていない．肺病変については4月末時点で局所制御率は100％である．肝腫瘍に対しては徐々に線量アップを行い可能な部位には肺腫瘍と同じ線量を現在では用いている.

15　複数回のガンマナイフ治療を施行した転移性脳腫瘍症例の検討

佐藤　光弥・森井　　研・秋山　克彦
五十川瑞穂*
北日本脳神経外科病院脳神経外科
新潟大学脳研究所脳神経外科*

ガンマナイフ治療は，1回の照射で頭蓋内疾患を制御する治療方法として普及した．しかし，転移性脳腫瘍の場合には，再発に対して複数回の治療も可能であることが，通常の全脳照射と比較して利点になっている．当施設での現状と効果や問題点について検討した．2006年5月31日まで，のべ1,429例の転移性脳腫瘍にガンマナイフ治療を施行した．そのうち複数回の治療を受けたものは239例であった．複数回の内訳は2回が175例，3回が47例，4回以上が17例であった．初回治療時の腫瘍縮小効果が明らかで，QOLの維持に有用であった症例が複数回治療の適応となっている．複数回治療の効果も，初回治療と同様に期待できるが，全身状態が進行している場合には，治療を断念する選択も考慮する必要がある．その決定は，原発巣を治療する主治医と患者自身とガンマナイフ治療医が十分にコミュニケーションをとってなされるべきであると思われる.

16　早期胃癌におけるセンチネルリンパ節の検討

中川　　悟・梨本　　篤・藪崎　　裕
土屋　嘉昭・佐藤　信昭・瀧井　康公
野村　達也・神林智寿子・田中　乙雄
県立がんセンター新潟病院外科

【目的】早期胃癌におけるセンチネルリンパ節（SN）の同定および微小転移（MM）を検討した.

【方法】

1）SN：早期胃癌80例を対象とした．ICG色素法を用い49例には漿膜側より31例には術中内視鏡により注入し，着色リンパ節（GN）を摘出し，GN同定率と偽陰性割合を検討した.

2）MM：リンパ節転移陰性とされたpSM癌38例を対象とした．全摘出リンパ節をCAM 5.2にて免疫染色し，MMの有無を検索した.

【結果】

1）SN：リンパ節転移は6例に認められた．平均摘出GN数は3.8個，GN同定率は98.6％であった．リンパ節転移を認めた6例中4例でGN以外に転移を認め偽陰性割合は66.7％であった.

2）MM：38例中4例（10.5％）にMMを認めた.

【結語】少数ながら早期胃癌においてもMMは存在する．偽陰性を66.7％に認めICG色素法によるGN同定法による縮小手術には慎重である必要があると考えられた.

17　Stage Ⅳ胃癌に対する姑息切除・減量手術症例の検討

藍澤喜久雄・佐野　　文・森岡　伸浩
鳥越　貴行・宮下　　薫
燕労災病院外科

【目的】Stage Ⅳ胃癌に対する姑息切除・減量手術症例の治療成績を検討する.

【方法】手術的Stage Ⅳ胃癌243例中，姑息切除あるいは減量手術となった159例を検討対象とした.

【結果】肝転移，腹膜転移のいずれかを有する症例は119例（74.9％），両者が陽性の症例は15例（9.4％）であった．手術の郭清度はD1以下が88

NII-Electronic Library Service